

室においても、その具体的な実践がなされているものと思います。

しかし一方でこんな声も聞かれます。

「個を生かす、個に応じた指導が重要であると言われ、私も同感であり、何とかそれに迫るような授業づくりをしなければと常々考えています。でも、何となく『差別している』と受け止められるのではないかなとか、学力差が拡大してしまうのではないかな……などと思うと、やっぱりクラスの生徒全員に同じ課題を与え、同じレベルにまで到達させようとしてしまうのです。無理があるとは思いつつも……。」

これは、中学校で頑張っているあるベテラン教師の生の声です。この声を聞いていて、とてもうなずけるところもありますが、この悩みを解決していかなければ、個性重視の教育には近づけないように思えてなりません。

確かにこれまでの教育では、子どもの学びの過程よりも学びの結果を問う授業が展開されてきた傾向があります。「できたか。できなかったか。」ということに目が向けられがちでした。

しかし、結果だけに目を向けていたのでは、子ども一人一人の個性を育てることはできないように思います。その子が、どのような考え方で、どんな手続きをしてこの結論に至ったのか、ということに目を向けなければ、その子らしい学習の姿をとらえることもできないし、その子の個性を発揮した授業にもつながらないと考えます。

#### ① 個性を伸ばす指導

子どもはその誰もが個性、つまり他の誰とも違う能力、態度、性格、興味・関心、意欲など「その子特有のよさ」を持っています。それは個人差としてとらえられたり見られたりしています。人間として生きていくためには、是非ともその個性を発揮させていく必要があります。



個性を伸ばす指導の充実、推進を図っていくためには、私たち教師は次のような認識に立つて指導に臨むことが必要であると思います。

一つに、はじめに指導する内容があるのではなく、まず、多様な個性の持ち主である子どもがいるという考え方に立つことです。この考えによる教育は、究極的には子ども一人一人の個性を伸ばし、自己実現していく子どもの育成につながるものです。

二つとして、子どもの個性を伸ばすのは、その子自身です。子どもが自らのよさを理解し、そのよさを自らの力で伸ばしていくことによって個性はさらに質を高めていくことができるのです。私たち教師は、それを支えるべき支援者であり、強引に指導する存在ではないことを肝に銘じなければなりません。

#### ② 個に応じた指導

子どもの個性は、性格、身体、学力、経験、興味・関心、学習の仕方などに個人差としてあらわれています。

計算をさせても、予定時間の半分もかからずに全部やり終える子どもがいれば、時間がきても半分しかできない子どももいます。国語に興味を持っている子がいれば、理科が好きな子どももいます。教室に35人の子どもがいれば、教師にとっては35通りの考え方やものさしと方法